

## 2017 年度 入学 試験 問題

# 世界史 B

(試験時間 13:15～14:15 60分)

1. この問題冊子が、出願時に選択した科目のものであることを確認のうえ、解答してください。
2. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
3. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
4. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
5. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。
6. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
7. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

I 次の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。(33点)

ペルシア戦争は、アテネをスパルタと対等の地位にまで押し上げた。勢いに乗ったこの国のその後の発展はめざましい。いくたの曲折を経て、ペリクレスのもとにポリス民主制を確立し、古典文化の盛期を現出させる。そのうえ、東地中海の交易の中心として、経済的にも繁栄の一途をたどるのである。

マラトンおよびサラミスの戦いは、ともにアテネ将兵の機略と勇武とを天下に示した、戦史にまれな大勝利であった。しかし10年の歳月をへだてた両会戦が、それぞれアテネ史のうえにもつ意味を考えると、そこには無視できない差異が認められる。それはひとことでいえば、戦いの主役の違いである。

マラトンの戦いで活躍したのは、中堅以上の市民からなる重装歩兵たちであった。これに反し、前480年、第2回のペルシア来寇にさいしてものをいったのは、アテネの海軍力である。その決定的瞬間において、戦士たる市民男子は階層のいかんを問わず、すべて海上に浮んだ。そこでは、搭乗戦闘員として艦船に乗り組んだ重装歩兵よりも、漕ぎ手である下層市民の働きの方が、戦いの推移に決定的な意味をもった。

このことが以後のアテネの政治の在り方に及ぼした影響は大きい。下層市民たちがただちに政治の主役にのしあがったわけではない。しかし、ギリシア防衛に大きな役割を果たし、その発言力を強めつつあった彼らの動向を無視することは、もはやだれにもできない。覇権を競う有力者のうち、このような歴史の潮流を見定め、それに掉さした者が終局の勝利をおさめるのである。アテネ民主制の確立とは、その結果にほかならない。

(伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史—ポリスの隆盛と衰退』(講談社学術文庫, 2004年)より。)

【設問Ⅰ】 下線部①に関する以下の問に答えなさい。

アテネとスパルタに関する(ア)～(エ)の記述について、 ～  内にあてはまるもっとも適当なカタカナの語句を記述解答用紙に記入しなさい。

(ア) アテネはイオニア系の市民からなるポリスである。一方、スパルタはドーリア系の市民が  と呼ばれる非ドーリア系の被征服民や商工業に従事する  (周辺民) を支配するポリスであった。

(イ) ペルシア戦争後、アテネは  同盟の盟主として、ペルシアの再侵攻に備えた。

(ウ) 前431年、アテネとスパルタは、 戦争に突入し、最終的にアテネが敗れた。

(エ) 前338年、マケドニアのフィリッポス2世が、 の戦いでテーベとアテネの連合軍を破り、スパルタを除く全ポリスを集め、 同盟を結成し、ギリシアの覇権をにぎった。

【設問Ⅱ】 下線部②～⑧に関する以下の問の答えを、マーク解答用紙にマークしなさい。

問1 下線部②のペリクレスは、アテネの全盛期を代表する政治家である。ペリクレスが指導した時代のアテネに関する記述として正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

(a) ペリクレスの指導の下で民会を中心とする間接民主制が実現された。

(b) ペリクレスの指導の下で陶片追放<sup>トウペン</sup>の制度が廃止された。

(c) 一部を除き、公職につくものは、一般市民から抽選で選ばれた。

(d) 奴隷<sup>ドレイ</sup>の反乱を防ぐため、リュクルゴスの制を敷いた。

問2 下線部③に関連して、古代ギリシアの文化に関する記述として正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) アレクサンドロス大王の教育を行ったアリストテレスは、イデア論を唱えた。
- (b) ヘロドトスやトゥキディデスは、歴史記述の祖（歴史の父）と呼ばれる。
- (c) ピタゴラスは、万物の根源は水と考えた。
- (d) アリストファネスは、三大悲劇詩人のひとりである。

問3 下線部④に関連して、ギリシア周辺では歴史上著名な海戦が行われてきた。それらの海戦に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) サラミスの海戦（前480年）では、テミストクレスの指導により海軍を<sup>かくじゅう</sup>拡充していたアテネをはじめとするギリシア連合軍がペルシアを破った。
- (b) アクティウムの海戦（前31年）では、オクタウィアヌスが、クレオパトラと結んだアントニウスを破った。
- (c) プレヴェザの海戦（1538年）では、オスマン帝国がスペイン・ヴェネツィアの連合艦隊を破り、地中海の制海権を手にした。
- (d) トラファルガーの海戦（1571年）では、フェリペ2世のもとで全盛期を迎えたスペインがオスマン帝国の海軍を破り、その脅威を和らげた。

問4 下線部⑤に関連して、以下の文章はこの時期に起こったことを記述している。文章中の  に入るもっとも適切な語句を1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

マラトン及びサラミスの戦いの後、 の戦い（前479年）では、ペルシアに対するギリシアの勝利が決定的となった。

- (a) アンカラ
- (b) イッソス
- (c) プラタイア（プラタイアイ）
- (d) ポエニ

問5 下線部⑥に関する記述として正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) ここでいうペルシアは、アケメネス朝ペルシアである。
- (b) ここでいうペルシアは、アッパース朝ペルシアである。
- (c) ここでいうペルシアは、セレウコス朝ペルシアである。
- (d) ここでいうペルシアは、ササン朝ペルシアである。

問6 下線部⑦に関連して、ギリシアの歴史に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) ビザンツ帝国(東ローマ帝国)では、ギリシア正教とギリシア古典文化を融合させた文化が生まれ、7世紀以降ギリシア語が公用語として用いられた。
- (b) 19世紀、オスマン帝国内のギリシアが独立戦争を開始し、最終的にギリシアの独立が国際的に承認された。
- (c) ミケーネ文明の時代のギリシア人は、城塞のある王宮を中心に貢納組織と官僚制を持つ国家を形成した。
- (d) 第二次世界大戦後、内戦状態にあったギリシアやソ連と対立していたトルコに対してアメリカ合衆国による援助が与えられた。

問7 下線部⑧に関連して、アテネ民主制確立までの出来事について誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) 前7世紀にドラコンによって法律が成文化された。
- (b) 前6世紀にソロンの改革により財産額によって市民の参政権を定めることとなった。
- (c) 前6世紀にペイストラトスが僭主政治を確立した。
- (d) 前6世紀にエウクレイデスは、血縁的な部族を解体し、民主制の基礎を築いた。

II 次の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。(35点)

インドを植民地として支配する契機となったブラッシーの戦いは1757年のことであつたが、このときイギリス東インド会社の指揮者であつた  がはじめて、インド人兵士を傭兵として採用した。このインド人傭兵のことを、イギリス人は「セポイ」と呼んだのだが、「セポイ」はあくまでも東インド会社が使用した傭兵だったのであつて、イギリス本国なり政府なりとは直接には何の関係もなかつた。

東インド会社は貿易会社であり、商事会社にほかならなかつた。ブラッシーの戦い以前はいうまでもなく、ブラッシーの戦い以後になつても、東インド会社は自らを商事会社であると主張しつづけていた。 というのは、先にも書いた通り、地税を徴収する権利だけども、その権利を得たからといって、その地域を支配する行政権は得ていない。商売をする必要上、地税収入を入手するだけだ。このように東インド会社は主張していたのである。

だけどイギリス人流の合理主義でもつて、インド現地のザミンダールの人たちからバッチリと地税を取り立てようとするには、やはりその地域に対する行政的支配を行わないわけにはいかない。ムガール(ムガル)帝国の行政も地方政府の組織も弛緩していた中で、武力を伴つた行政権力の発動がなければ、能率的な  権限による地税収入の確保は得られない。

東インド会社の貿易収支はこれによつてはじめて改善され、「インドは儲かる」ところとなつたが、その背景には、武力による植民地支配があつたわけである。そしてそのような武力による支配を行うためには、東インド会社は「会社軍」をもたねばならなかつた。いかにインドでは傭兵は珍しくないといつても、商事会社であるはずの東インド会社が「会社軍」をもつということは、やはり奇妙なことではなかつたのか。

奇妙なまま特異なまま、外見的にはいよいよ繁栄してつたのである。イギリス人からなる東インド会社軍将校の数も、1763年には114名であつたものが、69年には500人に、さらに70年代以降急速に増え、84年には1069人にもなつた。かれらが「セポイ」を下士官、兵士に従えて、インド各地に征服戦争を展開したのであつた。

マイソール戦争、ロヒラ戦争、マラーター戦争等々の、イギリスによるインド征服戦争はかれらによつて遂行された。東インド会社はもはや商事会社でも何でもなし、

政府の植民地支配下請け会社と化した。このような東インド会社の変質はしかし、商業資本家の経営する商事会社の本来の姿を示したものであったのかもしれない。

もともと東インド会社の営業内容は、東インド現地の産物を本国に持ち帰り、それを他のヨーロッパ諸国に売りさばるか、本国の消費者に販売して、商利を稼ぐところにあった。しかし、利幅をあげるためには、他のヨーロッパ諸国の商人や現地商人の競争を排除しなくてはならない。そのために、武力を用いて競争の排除にも乗り出さなくてはならない。プラッシーの戦いは競争者フランスの排除を目的としたものであった。そして同じ原理で現地商人や支配者を排除するために商事会社が軍を用いるというはなはだ奇怪な行動に出るということにもなった。

当然このような奇妙な行動は、東インド会社の商事会社としての性格を変えたばかりでなく、会社そのものの存在を脅やかすものとなった。そのような奇妙な行動のために会社がかかえ育成してきた「セポイ」が、最終的に会社の死命を制することになったのも、当然といわねばならないであろう。

商業資本家が経営してきた「東インド会社」であっただけに、それは商業資本そのものの赴くところであったのかも知れない。けれども、東インド会社が死地に赴くまでは、イギリス本国での産業革命という世界史的事象との関連を見落とすわけにはいかない。

18世紀の末から19世紀のはじめにかけて、ちょうど今から200年ほど前に、イギリスに産業革命がはじまったというけれども、それは今まであったインド綿業を崩壊させ、イギリス綿業を世界市場に雄飛させたという点でもきわめて重要な歴史的意義をもつものであった。インド綿織物の輸入を主な営業内容としてきた東インド会社は、その結果として当然その存立基盤を失うことになるのである。

(浅田實『東インド会社 巨大商業資本の盛衰』講談社現代新書より抜粋)

【設問Ⅰ】  ～  内に入るもっとも適当なカタカナの語句を記述解答用紙に記入しなさい。

【設問Ⅱ】 下線部(ア)～(オ)に関する以下の問の答えとしてもっとも適当な語句を記述解答用紙に記入しなさい。

問1 下線部(ア)について、この戦いはイギリスとフランスが展開した植民地争奪戦の1つである。ブラッシーの戦いと並行して、北アメリカ支配をめぐるイギリスとフランス間で起きた戦争は何と呼ばれるか。

問2 下線部(イ)について、イギリス東インド会社は1600年、誰の特許状により成立した貿易会社か。

問3 下線部(ウ)について、イギリス人が「セポイ」と呼んだインド人傭兵は、現地の言葉（ウルドゥー語）では何と呼ばれるか。

問4 下線部(エ)について、ムガル帝国の初代皇帝は誰か。

問5 下線部(オ)について、1845年から1849年にかけて、パンジャブ地方において2度にわたって行われた戦争は何と呼ばれるか。

【設問Ⅲ】 下線部①～⑦に関する以下の問の答えを、マーク解答用紙にマークしなさい。

問1 下線部①に関する以下の文のうち、正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) ザミンダールとは、土地所有権を認められた耕作者のことを意味する。
- (b) ザミンダリー制とは、仲介者を排除して、国家的土地所有のもとで農民に土地保有権を与えて徴税する方法である。
- (c) ザミンダリー制によって、農民からの徴税が確実となり税収が飛躍的に増大する一方、農民の生活は困窮した。
- (d) ザミンダリー制によって、ザミンダールは領主的性格が強くなった。



問2 下線部②に関して、この戦争に勝利したイギリスは、インドのどの地域の支配を確立したか。以下のうち、正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合は(e)を選びなさい。

- (a) インド東部
- (b) インド西部
- (c) インド南部
- (d) インド北部

問3 下線部③に関する以下の文のうち、誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合は(e)を選びなさい。

- (a) マラーター戦争は、マラーター同盟との戦争である。
- (b) マラーター戦争は、3次にわたって行われた。
- (c) マラーター戦争において、イギリスはベンガル太守を破った。
- (d) マラーター戦争に勝利したイギリスは、デカン高原を支配した。

問4 下線部④に関して、1857～1859年に起きたインド大反乱に関する以下の文のうち、誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合は(e)を選びなさい。

- (a) 大反乱の背景の一つには、「藩王国はんおうのとりつぶし政策」によって没落した旧支配層の不満があった。
- (b) 大反乱の指導者の一人であった、インドの小国の王妃ラクシュミー=バーイーは、その後「インドのジャンヌ=ダルク」として称えられている。
- (c) 1857年、インド人傭兵がデリー城を占拠し、同年イギリスはデリーを奪還した。
- (d) インド人傭兵が擁立したムガル皇帝は、イギリス国王への反乱罪でマレー半島流刑に処せられた。

問5 下線部⑤に関する以下の文のうち、誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合は(e)を選びなさい。

- (a) イギリスの産業革命によって力をつけた産業資本家は、自由貿易体制を求め、イギリス東インド会社を批判した。
- (b) 1813年、イギリス東インド会社は中国貿易の独占権を廃止された。
- (c) 1833年、イギリス東インド会社は商業活動そのものの停止が定められ、翌年実施された。
- (d) イギリス東インド会社は、インド統治改善法の成立により活動を停止し、1858年に解散した。

問6 下線部⑥に関して、誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合は(e)を選びなさい。

- (a) 17世紀以降イギリスに輸入されたインド産綿布は、良質・安価を理由として人気を博し、イギリスの毛織物業をおびやかした。
- (b) インド綿業の衰退により、インドはイギリスから工業製品を大量に輸入する立場になった。
- (c) インド綿業の衰退により、インドはアヘンや綿花などの一次産品の輸出を増大させた。
- (d) インド綿業の衰退による貿易赤字を解消するために、インドは、中国やアフリカ、イギリスに対して輸出を行うという多角的な貿易構造を形成していった。

問7 下線部⑦に関して、イギリス東インド会社の解散後に始まったイギリスによるインドの直接統治に関する以下の文のうち、誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合は(e)を選びなさい。

- (a) 1858年、インド帝国が成立することによって、イギリスによるインドの植民地化が完成した。
- (b) イギリス国王は、「インド皇帝」という称号を使うことを認められた。
- (c) インド帝国では、イギリス政府の直轄州と自治権をもつ藩王国はんおうが存在した。
- (d) イギリスは、インド人同士の対立を作り出すことで支配を容易にする「分割統治」という統治方法をとった。

Ⅲ 第2次世界大戦後のアジアについて次の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

(32点)

第2次世界大戦後、東南アジア諸国は独立運動<sup>①</sup>を展開した。1948年には  連邦が成立し、1957年に正式に独立した。1963年には  連邦を核にして、サラワク等が参加してマレーシア連邦が形成された。

独立後のインドネシアでは、スカルノ大統領は中国との関係を強めていた。しかし、1965年の九・三〇事件<sup>②</sup>をきっかけに、スカルノは1967年に失脚した。当時の  将軍(1968年に大統領に就任)が大統領代行となり、親米反共路線をとり、東南アジア諸国連合(ASEAN)を他国と結成した。

インドは1947年にイギリス政府から独立の承認を勝ち取った。しかし、連邦制による統一インドの独立を目指す国民会議派とムスリム国家の建国を主張する  が指導する全インド=ムスリム連盟の対立がおこり、同年ヒन्दゥー教徒が多くを占めるインドとムスリムが多数を占めるパキスタンの2国に分裂した。1948年には独立の父ガンディー<sup>③</sup>が暗殺された。インドの初代首相の  は、対外的には東西両陣営に属さない非同盟中立の外交政策をすすめていた。しかし、1959年のチベット騒乱および1962年の中印国境紛争により、事実上非同盟中立の外交政策を放棄した。このインド連邦の初代首相である  が亡くなった翌年の1965年に領有をめぐる戦争<sup>④</sup>がおこった。なお、隣国のセイロンは1948年に独立し、1972年にスリランカと国名をあらためた。

1948年にアメリカの支援によって、李承晩を大統領とする大韓民国(以下、韓国と呼ぶ)が誕生した。同年ソ連の支援を受けて金日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮と呼ぶ)が成立した。1950年、北朝鮮は南北統一を目指して南部に侵攻した。国連安全保障理事会はこの行動を侵略と認め、韓国支援のため国連軍を派遣した。<sup>⑤</sup>1953年には休戦が成立し、北緯38度線で南北分断が固定化された。これが朝鮮戦争である。韓国では1963年に朴正熙<sup>⑥</sup>が大統領になり、1965年に日本と日韓基本条約をむすび、国交を正常化した。<sup>⑦</sup>

【設問Ⅰ】 上記の文章の A ～ D に入るもっとも適切な語句を記述解答用紙に記入しなさい。

【設問Ⅱ】 上記の文章の下線部①～⑧に関する以下の問の答えを、マーク解答用紙にマークしなさい。

問1 下線部①に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) フィリピンはアメリカから独立した。
- (b) タイはフランスから独立した。
- (c) セイロンはイギリスから独立した。
- (d) インドネシアはオランダから独立した。

問2 下線部②に関する記述として正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) マレーシア連邦は、アメリカの主導で反共的な集団防衛組織である東南アジア条約機構に参加した。
- (b) インドネシアは非同盟の中立外交をすすめ、平和五原則を発表した。
- (c) ボルネオ北部のサバはマレーシア連邦の形成に加わった。
- (d) 中国系住民の多かったシンガポールはマレー人の支配を嫌ったため、マレーシア連邦の形成に加わらなかった。

問3 下線部③に関する記述として正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) これにより、インドネシア共産党は壊滅<sup>かいめつ</sup>し、軍部が政権を握った。
- (b) これにより、インドネシアは国連を脱退した。
- (c) インドネシアは、反共反米という独自の路線をとるようになった。
- (d) インドネシアでは自らの伝統文化を再評価し、民族意識の形成をめざすプティ=ウトモ運動が盛んになった。

問4 下線部④に関する記述として、インドネシア以外で東南アジア諸国連合（ASEAN）を結成した国で正しいものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) ヴェトナム
- (b) カンボジア
- (c) シンガポール
- (d) ビルマ

問5 下線部⑤に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) イギリスがインド自治の約束を破り、ローラット法を制定したため、ガンディーはこれに抗議し、全国的な運動を展開した。
- (b) ガンディーはヒन्दゥー教徒とムスリムの融和を説いていた。
- (c) ガンディーはロンドンで弁護士資格をとり、南アフリカで不当な扱いを受けていたインド人出稼ぎ労働者たちの地位改善のために献身した。
- (d) 国民会議派は、ガンディーの指導の下、サティヤグラハ（非暴力・不服従運動）を展開した。

問6 下線部⑥に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) 以前から継続していたインドとパキスタンの間でのカシミールの帰属についての紛争は1965年に再燃したが、その翌年ソ連の仲介によって休戦した。
- (b) カシミールは住民の多数がムスリムであったが、<sup>はんおう</sup>藩王がヒन्दゥーであったため、その帰属が問題化した。
- (c) インドとパキスタンの間では、このカシミールの帰属については現在でも未解決である。
- (d) ヒन्दゥー教徒中心のタミル人が、シンハラ人優遇政策に反発したのが原因で戦争が始まった。

問7 下線部⑦に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) この戦争により、日本の鉱工業生産が戦前の水準を超える経済発展をするという特需がもたらされた。
- (b) この戦争を契機にアメリカは極東における反共封じ込め政策にとりかかり、同盟網を張りめぐらせた。日米安全保障条約の締結はその政策の一環である。
- (c) 南北分断国家が成立してから、アメリカとソ連は朝鮮半島から撤退した。しかしその結果北朝鮮が軍事的優位に立ち、韓国に侵攻した。
- (d) 国連軍が北朝鮮軍を中国国境近くまで追い込んだが、中国が人民義勇軍を派遣し、北朝鮮軍を支援した。

問8 下線部⑧の人物に関する記述として誤っているものを1つ選びなさい。なお、該当するものがない場合には(e)を選びなさい。

- (a) 軍事クーデターをおこして政権を掌握し、大統領になった。
- (b) 経済政策を促進する一方で、強権体制をとって民主主義を弾圧した。
- (c) 大統領権限を強化し、政府主導の開発や国内の引き締めを力をついだ。しかし不況と労働運動の激化による政治危機のなかで、側近に暗殺された。
- (d) 南北統一の機運を生んだ前大統領の太陽政策が破棄<sup>はき</sup>された。